

# 学べる学校図書館づくりをとおしての情報活用能力の育成

## ～学校図書館を中核としたICT活用の探究型学習の推進～

学校図書館 情報活用能力 探究型学習

山形県 山辺町立作谷沢小・中学校

〒990-0351  
山形県東村山郡山辺町大字築沢636番地

<http://www.town.yamanobe.yamagata.jp/site/sakuya/>

### 1. 研究の背景

本校は、山形県の県都山形市の北西に隣接する人口1万4000人あまりの山辺町にある学校である。町の中心部から車で20分程の位置にあり、周囲を山に囲まれ、いたるところに清水が湧き出る自然豊かな中山間地のへき地に、小学生16名（1年：4名・2年：3名・3年：2名・4年：3名・5年：3名・6年：1名）、中学生11名（1年：3名・2年：6名・3年：2名）の小中併設の極小規模校である。

今年度で、小中併設校となり30周年の節目を迎える。小学校、中学校それぞれに図書館が設置されているが、学校司書もいない上、教職員も少ないため、本の整理や選書、除籍などは満足にできていない。そのために本の分類・配置等も活用しにくい状態の上、情報が古い本も多く、授業などで利用したくとも必要な本が探せない等活用しにくい現状であった。さらに、小学校、中学校2カ所に図書館があり、小学校、中学校合わせると蔵書数もある程度あるが、どちらにどんな本があるのかも分からないので、小学校、中学校の相互利用もできない状況であった。

また、全国学力・学習状況調査の読書に関する2項目とも、小学校、中学校とも全国・県と比べて低い数値という結果であった。

その上、子どもたちが使えるPCは小学校、中学校共通で使用するPC教室に9台のみで、総合的な学習の時間など小学校と中学校の時間が重なった場合や、中学生が一斉に使う場合などもPCの台数が足りない状況であった。

### 2. 研究の目的

これからの学校図書館としての役割は、「読書センター」としてはもちろん、これからは「学習センター」「情報センター」としての機能を十分に発揮できる図書館の整備を進めることが必要である。そのため、子どもたちが図書館に行けばなんでも調べることができる。また、居心地がよく行きたくなる図書館、本を読みたくなる環境づくりが必要であると考えた。また、「学習センター」「情報センター」

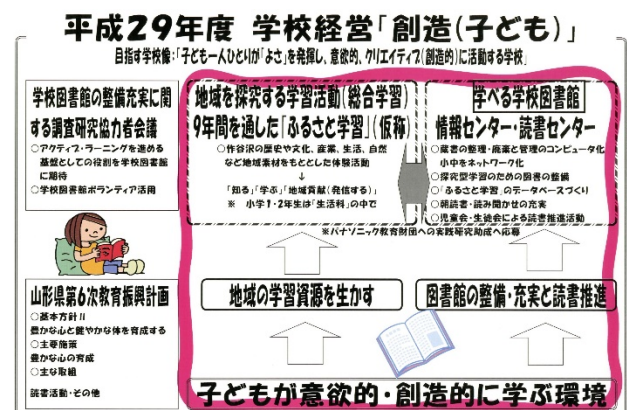


図-1

としての図書館には、PC等の設置はかせないと考え、子どもたちが主体的に学べるICT機器の整った環境づくりを進める。そして、「読書センター」と「学習センター」「情報センター」の機能を合わせ持った図書館を整備し、子どもたちの情報活用能力を高めていく。

併せて、これまで取り組んできた総合的な学習の時間での地域学習を大幅に見直し、小中併設校の「よさ」を生かした活動にし、小中連携を一層推進したいと考えた。そのために、総合的な学習の時間を「ふるさと学習」として9年間を見通したものに編成し直す。さらに、県で進める**探究型学習を総合的な学習の時間を中心に進め**、図書館で本やインターネットから、様々な資料等から情報を適切に探しだし、それらを用いて自分の考えを広げながら深めながら、組み立てながら学べる環境を整える。

### 3. 研究の経過

①時期	②取り組み内容	③評価のための記録
6月～8月	小学校、中学校図書館の図書の電算化と小中図書館のネットワーク化	写真（実践者） アンケート調査（児童生徒） 統計調査（児童生徒）
通年	学習センター・情報センターとしての機能の充実	写真（実践者）
11月	学校図書館視察	視察者のコメント
8月～12月	図書の配置替えと環境整備	写真（実践者） アンケート調査（児童生徒）

### 4. 代表的な実践

#### （1）電算化と小中図書館のネットワーク化

まず取り組んだのは小学校、中学校両図書館の電算化である。児童生徒、教職員も少なく、委員会活動も少ない人数で行っている上、学校司書もない。教職員も複数の仕事を持ち、専門に図書館だけに掛かり切りになれない。そこで、小学校、中学校の両図書館とも図書の電算化を図り、図書の管理、貸し出し等の簡易化を進め、児童生徒が利用しやすく、教職員が管理しやすい図書館を目指した。また、膨大な図書の電算化の作業には、保護者や地域のボランティアの方々の協力を得て進めた。

さらに、小中併設校の利点を生かし、小学校と中学校の図書館を校内LANでつなぎ、児童生徒が相互にどちらの図書館からも貸し出しや検索ができるように整備した。



## (2) 学習センター・情報センターとしての機能の充実

### ①学習センターとしての活用

小学校図書館にはタブレットPCを常設するとともに、小学校、中学校とも、これまで廊下等に保管していた電子黒板を図書館に常時設置することにした。



さらに、各学年の発達段階に応じて、教科や英語活動などでタブレットPCや電子黒板などのICT機器の活用を積極的に進めた。特に電子黒板を図書館に設置したことにより、ICT機器を活用できる学びの場としての図書館、授業で様々な情報が活用できる環境が整った。



### ②情報センターとしての整備（通年）

図書以外のパンフレットやリーフレットなどの資料や新聞記事などの収集、保管し、活用できるよう整理なども少しずつ取り組んでいる。さらに、授業でのまとめやレポートなどもデータ化し、保管・活用できるよう整備を進めているところである。

## (3) 学校図書館視察

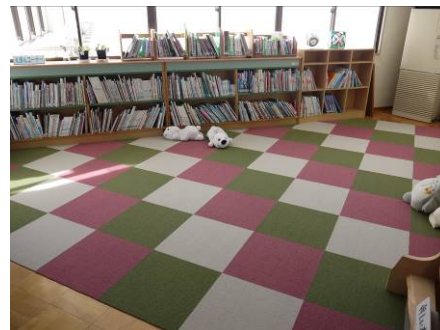
図書館の整備を進めるために、図書館教育、読書教育の先進校の視察を行った。本校と同地区にあり、昨年度子ども読書活動優秀実践校を受賞した天童市立山口小学校と隣の市の山形市にある山形市立西小学校の2校を小学校、中学校それぞれの図書館担当の教諭が視察した。図書の展示や掲示物などの環境整備を学び、本校の図書館整備の参考とした。

## (4) 図書の配置替えと環境整備

視察した先進校のよい点や児童生徒にもアンケートを実施し、どんな図書館であれば今以上に活用するようになるかを検討し、次のような内容の整備を進めた。

①学習コーナー、読書コーナーなどを設けるために図書の

配置換えを行った。あわせて、スチール本棚等の危険性のある書架の撤去を行い、高すぎる書棚は低いものに変更した。

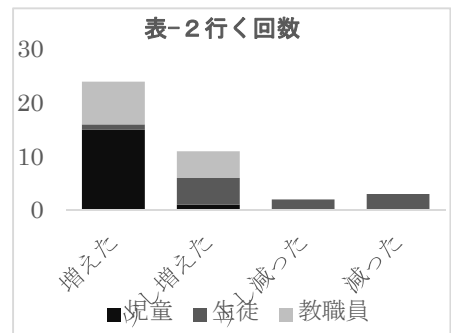
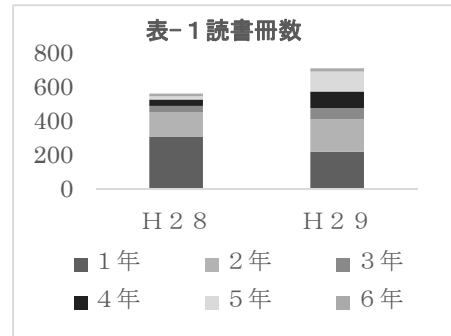




- ②パネルサインや図書の展示の仕方、掲示物、ぬいぐるみなどの展示物の工夫などを行った。
- ③本の移動は児童生徒全員で行い、併せて図書館の図書の並びの規則を学んだ。(分類法)
- ④小学校の図書館には、今まではなかった靴を脱いで本が読めるカーペット敷きのコーナーを設けた。

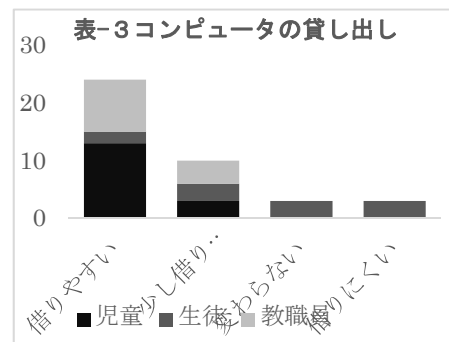
## 5. 研究の成果

(1) 電算化後は、図書館利用者が増え、貸し出し冊数が増加した。これは、電算化され、バーコードリーダーで読み込ませるだけで貸し出し、返却ができるようになり、小学校低学年でも容易に自分で操作し、借りられるようになったためである。表-1は小学校の平成28年度の後期(10月～3月：6ヵ月)と今年度(9月～1月：5ヵ月)貸し出し冊数の比較である。平成28年度の10月から6ヶ月間での貸し出し冊数は559冊。平成29年度の9月からの5ヶ月間で708冊。期間も違い、児童数も平成28年度より1名増え、顔ぶれも変わっているのに単純には比較できないが、1ヵ月短い期間にもかかわらず貸し出し冊数は約150冊と大幅に増加しているのは電算化の成果である。



さらに、表-2は、2月上旬に実施したアンケートの「図書館が新しくなってから、図書館に行く回数が増えましたか」という質問項目の結果である。小学生は、「増えた」「少し増えた」を併せると100%、中学生は「増えた」「少し増えた」を併せると、約55%となり、教職員も増えていると実感している。また、中学生の「少し減った」「減った」の要因は、後期であったため、中学3年生が受験に向けて、本等を読む余裕がなくなったことや、中学2年生が部活動の中心となり忙しくなった等の要因が考えられるが、おおむね小学生、中学生とも図書館に行く回数が増え、それにもない貸し出す数も増えたと考える。また、表-3からも電算化され借りやすいと感じている

小学生、中学生がほとんどであり、読書冊数増加の大きな要因と考える。中学生の「変わらない」「借りにくい」と答えた生徒がいるが、これは中学校の図書館のコンピ



ュータが不具合を起こし、1ヵ月近く貸し出しが出来なかったということが要因かと考える。

さらに、中学生が調べ学習に小学校の図鑑等を活用するなど少しずつ小学校、中学校の相互活用も増えてきている。

## (2) 小学校では

外国語活動をはじめ、理科、社会などの授業で日常的に図書室を活用している。中学校でも数学、社会を中心に図書館にある電子黒板等を授業で使用している。さら



に総合的な学習の時間を中心とした調べ学習やまとめ、レポート等に利用している。特に中学生はタブレットPCを活用し、総合的な学習の時間で取り組んだ「ふるさと学習」をプレゼンテーションソフトウェアでまとめ、県教育委員会主催の「郷土 Yamagata ふるさと探究コンテスト」に応募し、優秀賞を獲得した。

また、小学校図書館に設けたカーペット敷きのコーナーは、低学年の子どもたちを中心に、読み聞かせやくつろいだ中で本に触れるなど大いに活用されている。

## 6. 今後の課題・展望

### (1) 「学習センター」「情報センター」としての機能を十分に発揮できる図書館の整備

「読書センター」としての当初の目的は達成できたと考える。また、「学習センター」としても各教科の活用が広がっている。課題は「情報センター」としての機能である。図書以外の資料の収集、活用ができるように整備することである。資料は多岐にわたる上、整理し、活用できるようにするためには教職員が時間をかけて行わなければならない。そこで、資料の種類をできるだけ絞り、今必要なものに限定すること、また、収集方法、保管方法をパターン化し、誰でも簡単にできるような手立てを考える必要がある。まずは、身近な「作谷沢（地域）」「山辺町」「山形県」程度の分け方で、パンフレット・リーフレット類、新聞記事等のスクラップなどの紙ベースの資料からと考えている。映像資料、デジタルデータなどについては(2)で述べる。

### (2) 探究型学習を総合的な学習の時間を中心に

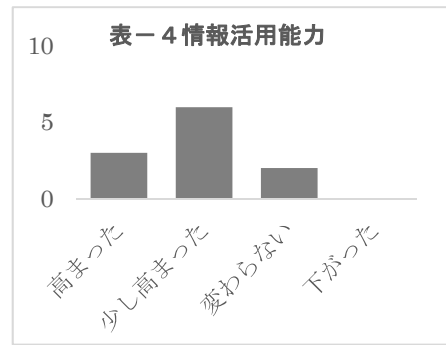
今年度の「ふるさと学習」の実践を終えて、次の学年にどうつなぎ、積み重ねていくかが課題である。小学校と中学校の連携も再度見直し、中学校は、小学校で取り組んだことと同じような内容では発展がないので、より高い次元での内容になるようにしなければならない。この課題は、それらをデータ化し、計画的に保管することで、過去のを参考にし、同じ内容を避け、発展させることができると考える。そのためには、専用のハードディスクを準備し、小学校低学年などの紙ベースでまとめたものは、画像データやPDFデータで、小学校高学年や中学生のプレゼンテーションソフトウェアで作ったものはそのままデータを保存するなどの手立て等を考えていきたい。

さらに、今年度は中学生のみの応募であったが、自分たちの成果を外部の様々なコンクール等に積極的に発信し、へき地小規模校でもやれるという自信を持たせていきたいと考えている。

### (3) 情報活用能力の育成と少人数への対応

表－４は、教職員への今回の取り組みで、情報活用能力は高まったかとのアンケート結果である。十分な成果とはいえない。ICT機器の活用だけで育成できるものではないが、タブレットPCの活用を中心に各教科で育成を図っていきたいと考える。タブレットPCを児童生徒各自が記録する道具や、考えを整理する道具として日常的に使うような姿を目指していきたい。

さらに、ICTの力を小規模校の弱い点を補うことや、本町全ての学校（本校を除くと中学校1校、小学校3校）の学校の図書館とネットワークを築き、活用を全町に広げたいと考えている。



## 7. おわりに

今年度は、図書館の環境整備が中心で、一番の目的である子どもたちの情報活用能力を高めていくことはまだまだ不十分である。しかしながら、アンケート等の結果から、児童生徒は以前より図書館を訪れる機会が増え、教師側も図書室を利用し、電子黒板、タブレットPC等の電子機器を使った授業を行うことが多くなった。また、教科や総合的な学習の時間に、子どもたちが自ら見つけた課題を主体的・協働的に課題を解決するために、真っ先に図書館に向かうようになった。小学校、中学校ともに図書館が賑やかになったのを実感している。

図書は、小規模校の課題である多様な考え方に触れることや他者とのコミュニケーションを補う一つの手立てだと考えている。さらに、ICTの力が加わればどんなへき地であろうと都市部の学校と同等の教育ができるのではないかと考える。直接人と人がふれ合うことは大事であるが、それは他校との合同学習等別な面で補っていくことを考えている。

今回、図書館とICT環境の充実を図ることがパナソニック教育財団の助成でできたことは、へき地小規模校でも十分に児童生徒に力をつけられるとの確信が持てた。これはひとえにパナソニック教育財団のご支援のお陰と感謝申し上げます。

## 8. 参考文献

- ・五十嵐絹子 編著（2009）『学校図書館ビフォー・アフター物語』国土社
- ・赤木かん子 著（2010）『読書力アップ！学校図書館のつくり方』光村図書
- ・片桐則夫 編著（2013）『「なんでも学べる学校図書館」をつくる』少年写真新聞社
- ・内山隆・玉井康之 著（2016）『実践 地域を探索する学習活動の方法』東洋館出版社
- ・長谷川元洋 監修・著書、松坂市立第三中学校 編著（2016）  
『無理なくできる学校のICT活用』学事出版
- ・天童市立山口小学校図書館 ・山形市立西小学校図書館